

碧峯奨学生インタビュー | 左勝則さん

＜ジョンズ・ホプキンス大学公衆衛生大学院 公衆衛生修士＞

公衆衛生の知見を生かし、生殖医療の発展に尽力

在日同胞の寄付と韓国政府の支援により1963年に設立された韓国教育財団は、在日同胞学生の学びを支えるため、長年にわたり奨学金事業を行ってきた。2003年には、グローバルな舞台で活躍を志す若者を支援するため、「碧峯奨学基金」を創設。今回は、その支援を受けてジョンズ・ホプキンス大学公衆衛生大学院で公衆衛生修士を取得し、現在は生殖医療に携わる左勝則さんに話を聞いた。

Q：現在のお仕事について教えてください。

A：現在は、自治医科大学産科婦人科学講座・生殖医学センター准教授として、不妊治療や体外受精などの生殖医療に携わっています。また、日本生殖医学会の渉外担当幹事も務めており、全国の体外受精に関するデータの統括や、定期的な報告会の準備、海外の学会・関連団体とのやりとりなども中心となって行っています。

Q：生殖医療の分野では、どのような取り組みをされているのですか。

A：例えば、がん患者の方が治療後に出産を希望される場合、卵子、受精卵、精子を凍結保存する「妊孕性温存療法」を行います。特に、初潮前の小児がん患者が、がん治療後に成人してから出産する方法である「卵巣組織凍結」については、近隣県では実施できる医療機関が限られているため、最先端の医療技術の導入に向けて準備を進めています。

Q：アメリカの大学院で、公衆衛生を学ぼうと思ったきっかけは何でしたか。

A：千葉大学大学院生時代は、地域社会で疾病を防ぎ、健康的な社会の実現を目指す公衆衛生学を専攻していました。より研究を深めたいという思いから、世界でも先進的な取り組みを行っている米国のジョンズ・ホプキンス大学公衆衛生大学院への留学を志しました。

Q：留学にあたって、資金面での不安はありましたか。

A：米国は物価が高く、授業料だけでなく生活費も含めると高額な負担になります。病院勤務などをいくつか掛け持ちして留学資金を貯めましたが、それでも十分ではありませんでした。そんなときに碧峯奨学金のことを知り、応募したところ採用されました。

Q：採用が決まったときのお気持ちはいかがでしたか。

A：とてもうれしかったです。資金がぎりぎりだったので、当初は単身で留学するつもりでしたが、支援を受けられたことで家族と一緒に渡航することができました。当時はすでに幼い子どもがいて、

妻は第2子を妊娠中でしたので、本当にありがたかったです。

Q：ボルチモアでの留學生活はいかがでしたか。

A：大学院がある東海岸の港町・ボルチモアでは、在米韓国人や日本人の方々と家族ぐるみの交流がありました。子育てで助け合ったり、ホームパーティーで互いの自宅を訪問したりと、楽しい思い出がたくさんできました。

Q：大学院では、どのようなことを学びましたか。

A：大学院では、病気の予防や治療方法など、世界でも最先端の公衆衛生の知識を学びました。不妊治療などの生殖医療は社会の影響を大きく受ける分野であるため、公衆衛生的視点に立った研究が欠かせません。留學で得た学びは非常に大きく、「留學していなかったら、今の自分はなかった」とまで言い切れるほど、貴重な経験となりました。

Q：留學で得た知見は、帰国後どのように活かされていますか。

A：帰国後は、留學で身に付けた世界最先端の知見を、自治医科大学生殖医学センターで学生や医師に伝えています。日本の生殖医療は急速に進歩しており、次世代も順調に育っていると感じています。

Q：今後、生殖医療の分野で取り組みたいことはありますか。

A：留學から帰国して10年以上が経ち、生殖医療における米国との格差はずいぶん縮まったと感じています。今後も次世代人材の育成に力を入れ、日本の生殖医療の発展に貢献していきたいです。

Q：韓国教育財団への思いをお聞かせください。

A：給付が決まったときのうれしさやありがたみは、今でも忘れられません。今まで以上に一生懸命働き、その恩に報いたいと思っています。

Q：碧峯奨学基金の意義について、どのように感じていますか。

A：留學のための資金が不足している在日同胞にとって、日本の奨学金制度には国籍による制限があり、応募できないことも少なくありません。そのため、こうした学生にとって、碧峯奨学金は本当にありがたい存在だと感じています。

Q：現在学んでいる碧峯奨学生へ、メッセージはありますか。

A：人生は、当初思い描いていた通りにならないこともあります。大切なのは、その経験をどう生かすかだと思います。想定外のことであっても、信念を持って取り組むことで新たな道が開けます。当初の理想と違っていても諦めずに、前へ進み続けてほしいです。